

令和3年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

( 中間・最終 )

呉中央中学校区 校番 13呉中央中学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(1年間) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
***	貫 生ききる根っこを育てる「豊かな学び」の創造	「主体的、対話的で深い学び」の実現 (教務・学年)  基礎学力の定着 (学年)  家庭学習の習慣化 (教務・学年)	授業の中で「思考し表現している生徒」の割合は、全体で89%で前回よりも4%上がった。各教科とも、タブレットを上手く活用しながら思考の場面を設定したことが結果につながったと考える。 通過率30%未満の割合が7年生では9%、8年生では10%、9年生が9%であった。しかし、8・9年生は中間よりも期末の方が減っているため、放課後学習や補充学習の取組が少し成果に繋がっている。全体としては、前期に比べて学習内容が難しくなるとともに増加している傾向にある。 家庭学習の各学年目標時間の達成率は、55%であり目標値よりも大きく下回っている。日頃から家庭学習を計画的に行うことが身に付いておらず、試験週間中になってもなかなか学習に向かうことが難しい。また、達成できていない生徒の約10%は通過率30%未満の生徒であり、学習の仕方が分かっていないことも要因である。	少しずつ成果が出ているが、まだ目標値には届いていないため、引き続き授業研究を深め、生徒の思考を促し表現ができる授業づくりを行っていく。 30%未満の生徒は固定化しているため、補充学習のみでは30%を超えることは難しい。そのため、日頃の課題の取組から個々に応じた対応をするなど意識して指導を行っていく。  主体的に学習に向かうことを目指したいが、そのためにも、まずは学習の習慣をつけさせる必要があるため、スタンダードを活用して学習計画を立てさせることや、タブレットドリルの課題を出すなど学習する環境を整える。
**	貫 生ききる根っこを育てる「豊かな生き方」の創造	「心の居場所」がある学校づくり (学年・生徒指導)  道徳的実践力の向上 (自己指導能力)の向上 (教務・学年)	今年度は制限のある中であったが、体育大会や文化祭を行うことができ、係や学級活動に参加する機会が昨年度より少し増えた。また個人面談も全学年で実施できたことにより「自分には良いところがある」82%「安心できる居場所がある」96%「先生に相談できる」88%とアンケートで肯定的な評価をつけた生徒は全体で89%であった。行事や学年での取組の中で、日々の生徒への声かけや定期的個人面談など子どもと向き合う時間を確保することで自己肯定感を高めることが概ねできたと考えられる。 「道徳の時間は役に立つ」と肯定的に捉えている生徒は91%で、前期よりも4ポイント上がった。コロナ禍においていろいろな制約がある中でも、人との関わりや様々な活動の場面において、道徳的な実践を確かめることができた生徒が多くいることが推察できる。	アンケートにおいて「自分には良いところがある」と感じている生徒の割合は、学年があがるにつれて89%、88%、79%と下がる傾向が強い。学校行事だけではなく、日々の活動や授業等でつまずきを感じている生徒への声かけなど、学校全体での取り組みを実践していく。  「道徳の時間は役に立つ」と考える生徒は多いが、自己指導能力について数値で評価を得ることは不確かである。この評価に関わる研究を行い実践していく。
*	貫 生ききる根っこを育てる「しなやかな体」の育成	体力・運動能力の向上 (体育科)  基本的な生活習慣の定着 (学年・生徒指導)	前年度よりも記録が伸びた生徒は、50m走では、男子80%、女子27%、20mシャトルランでは、男子83%、女子57%であった。平均では、男子82%、女子41%となる。特に女子の50m走に課題がある。男女ともに記録が伸びている生徒にはかなりの伸びがあり、伸びていない生徒は更に記録が低下しているという傾向があり、特に女子では顕著であった。コロナ禍における運動機会の減少により、体力・運動能力の二極化が大きくなったように思われる。  「朝、毎日ご飯を食べているか」という問いに対して、肯定的な回答をした生徒は、95%と生徒が確実に朝食を食べている。 遅刻については、遅刻の割合が前期4.1%から3.3%に減少した。特に9年生が前期と比べ延べ回数370回から288回に大幅に減少した。入試を意識した生活習慣とセルフコントロールの力が身に付いたと考えられる。また、他学年においても微小となった。2学期以降学校全体で遅刻を繰り返す生徒への家庭連絡を密にした成果だと考えられる。	小中で課題を共有し、継続的な取組が必要である。運動への興味関心が高まるような活動を仕組み、自ら運動機会を増やしていこうとする生徒を育てる。特に運動嫌いの児童・生徒には、運動の喜びや充実感、達成感を味わえるよう支援する。  2学期から、週に3回遅刻したら家庭連絡、月に10回以上の遅刻で保護者に来校してもらい指導及び改善策を考えるなどの取組を行っており、これを継続していく。その際、どうしたら遅刻が減少するか自分の生活習慣を見直し、改善策を考えさせるなど個人指導を継続していく。
業務改善	貫 業務改善を進め、元気で明るい職場を実現する	生徒と向き合う時間の確保  時間外勤務の縮減	生徒と向き合う時間が確保されていると感じる教員の割合は81%で中間報告時点よりも5ポイント上昇した。  時間外勤務が月45時間以下の教職員の割合は72%で、中間報告時点よりも29ポイント向上した。	タブレット等のICTの活用や生徒指導員、学校教育指導補助員やスクールサポートスタッフ、学年教員等との連携を強化し、引き続き業務の分散を図っていく。 業務分担の見直しや部活動指導の分散を図る。定時退校日の呼びかけを継続し、計画的に業務を行う。